

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520365

研究課題名(和文)プロペルティウスの文学理論と創作実践の解明

研究課題名(英文)The elucidation of Propertian poetical theory and composition

研究代表者

日向 太郎(園田太郎)(HYUGA (SONODA), TARO)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：40572904

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：古代ローマの恋愛詩人、プロペルティウス(前50年～前16年)が自作品において表明している詩論に着目した。ヘレニズム文学では、完成度の高い小品を重んずるカッリマコス主義が主流だった。プロペルティウスは、作品内部でカッリマコス主義を標榜していることから、従来その叙事詩忌避の側面が強調されてきたきらいがある。本研究では、この詩人がカッリマコス主義を墨守することを確認しつつ、同時にホメロス叙事詩への強い傾倒があることも指摘し、最終巻(第4巻第7歌および第8歌)においては、ホメロス作品への強力なオマージュが認められ、エレゲイア恋愛詩と叙事詩の見事な融合が実現していることを解明した。

研究成果の概要(英文)：The subject of the study was the poetical theory of Propertius (ca. 50 B.C.- ca. 16 B.C.) as expressed through his poetry. The Callimachean theory that aims at the production of carefully crafted short poems represented the mainstream of Hellenistic poetry. Since Propertius presents himself in his poems as a champion of Callimachean aesthetics, there has been an excessive tendency among scholars to emphasize his avoidance of epic poetry. While confirming Propertius' adherence to Callimachean aesthetics, the present study has also brought to light his high esteem of Homeric poems, as evidenced in particular by the homage paid to Homer's work in the Fourth Book of his Elegies (the seventh and the eighth elegies), and has elucidated the way in which Propertius has brilliantly united the two different genres of love elegy and epic poetry.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：西洋古典学 ラテン語詩文 プロペルティウス カッリマコス主義

1. 研究開始当初の背景

古代ローマの恋愛エレゲイア詩人、プロペルティウス(紀元前50年頃～同16年頃)についての研究は、1984年にJ.L. Butricaが記念碑的労作(*The Manuscript Tradition of Propertius*, Toronto/ Buffalo/ London 1984)を著して以来、新しい局面を迎え、本文校訂や注釈において多くの研究成果を生んだ。とくに近年は、S.J. Heyworth (Oxford 2007)やG. Gardina (Pisa 2005; Roma 2010)らの新しい校訂版が刊行され、Heyworth自身による校訂版の姉妹編とも言うべき注釈 *Cynthia* (Oxford 2007)、P. Fedeliによる多くの問題を含んでいる第2歌についての注釈(*Propertio Elegie Libro II*, Cambridge 2005)が上梓された。その他、H-C. Güntherが編者となった論文集(*Brill's Companion to Propertius*, Leiden/ Boston 2006)もプロペルティウス研究の基礎をなすものと言えよう。日本においても、1995年に中山恒夫が先駆的研究『ローマ恋愛詩人の詩論』においてプロペルティウスの詩論について有意義な考察を行っている。

この他、同じ恋愛エレゲイア詩人であるティブッルスやオウィディウスの『恋の歌 *Amores*』や『恋愛指南 *Ars Amatoria*』についても、本文校訂や注釈において良好な研究成果が上がっている。

こうして、従来難解な詩人とされてきたプロペルティウスではあるが、今後より踏み込んだ文学的研究を進める上での基礎部分がある程度固まり、本文を検討する上で考慮に値する材料もかなり揃ってきたと言える。

2. 研究の目的

私は、大学院時代(1989-1999年)を通じて、一貫してラテン詩の研究を進めてきた。大学院時代は上記中山恒夫教授から、ラテン文学研究の手ほどきを授かった。イタリア留学期間(1994-1996年)は、プロペルティウスの写本伝承について先駆的な研究を行なったA. La Penna教授から、ラテン文学全般について指導を受けた。1999年には、博士学位論文「ウェルギリウス『アエネイス』における造形芸術作品描写」において、大学院時代の研究成果をまとめたが、以降、ウェルギリウスの作品研究とともに彼と同時代に活躍した恋愛詩人ティブッルス、オウィディウスに着目し、研究を進めてきた。とくに、2008年には上記Fedeliによるプロペルティウス第2巻の注釈について書評を執筆する機会に恵まれ、これを機縁に、プロペルティウスについての関心を一層深めることとなった。とりわけ私が興味を持っているテーマは、彼の詩論であり、作中で叙事詩人と対置されている恋愛詩人の立場の問題である。現在本文については、依然として種々の問題を抱えてはいるものの、だいぶ整備が進んできたという印象がある。我々は、プロペルティウス作品について、このような文芸的関心に沿った研究を改めて意欲的に進める潮時を迎えているように思われる。

ローマの恋愛詩人たちはカッリマコス主義を標榜する反面、叙事詩を辞退し、叙事詩的題材を正面から取り上げることを避ける傾向がある。しかし、プロペルティウスは、神話的題材を好んで用い、度重なる叙事詩辞退、カッリマコス主義の表明には、かえって叙事詩への並々ならぬ関心が見え隠れしているように思われてならない。

こうした所見に基づいて、プロペルティウスが文学ジャンルとしての叙事詩についてどのような意識を抱いていたかを、その作品の精読を通して分析し、可能な限り時系列に沿って考察する。そうすることによって、恋愛詩の進化とジャンルとしての可動範囲を解明する。

プロペルティウスは作品の随所で、ホメロスに言及している。そしてホメロスや叙事詩への態度は、揺れ動いている。第1巻第7歌や第1巻第9歌には、ホメロスに対抗してテバイ伝説を題材とする叙事詩を手掛けている友人ポンティクスに呼び掛け、恋愛詩を軽んずる友人の見識を批判し、いざ恋に落ちたとき叙事詩は何の役に立たないものだと主張する。第2巻第1歌では、カッリマコス主義に基づき、叙事詩を辞退し、自分の取り組むべきジャンルが恋愛詩であることを宣言する。ところが、第2巻第10歌では、それまでには例がないほどに叙事詩創作への憧憬と展望を表明している。にもかかわらず、第12歌および第13歌では、自らが恋愛エレゲイア詩人であることを改めて自覚している。第2巻第34歌の前半では、再び恋愛エレゲイア詩の叙事詩に対する優位性を説くが、後半では、ウェルギリウスが『アエネイス』を手掛けていることに触れ、「何か『イリアス』よりも偉大なものが生まれる」と歌っている。おそらくウェルギリウスが、過去に辞退を表明しながら最終的には叙事詩創作を引き受けたことは、プロペルティウスにとっては大きな衝撃だったことだろう。

ウェルギリウスが『アエネイス』によって、またオウィディウスが『変身物語』によって、カッリマコス主義に立脚しながら叙事詩を創作するという離れ業を演じたあと、ローマにおいては叙事詩についてのタブー意識は消えるが同時に恋愛詩というジャンルは廃れ、カッリマコス主義も権威を失う。本研究はこのような古代ローマ文学の転換が、すでにプロペルティウス作品に兆していることを明らかにするものであり、古代ローマ文学史上のプロペルティウス作品の重要性を新たに意味付けるものとなろう。そして、プロペルティウスのみならず、紀元前1世紀のローマの詩人にとって権威ある綱領であるとともに桎梏となってきたカッリマコス主義の意味や根拠について再考する契機となる。

3. 研究の方法

まずは、複数の注釈書を参照しながら、プロペルティウス作品の各歌の精読につとめた。叙事詩とくにホメロス作品や『アエネイス』

との接点を拾い上げ、その模倣、翻案、詩人のホメロス解釈を吟味した。また関連する研究書や研究論文を渉猟し、研究動向の理解に努める。随時、国内、国外の研究者と連絡をとり、情報収集、意見交換を行う。毎年研究成果を報告することを基本とした。

2011年度は、まずは上述した Heyworth によるプロペルティウスの校訂版と注釈の書評を翌年度の『西洋古典学研究』第 61 号に掲載できるように準備を進めた(5.〔雑誌論文〕)。この時点でプロペルティウスについてまとめた研究成果を発表できる段階には達していなかったが、2010年度以前の研究成果を活かし、プロペルティウスに大きな影響を与えたウェルギリウスやプロペルティウス自身が大きな影響を与えたオウィディウスについての論考をまとめることを心掛けた(5.〔雑誌論文〕)。また同論考を所属している学会「フィロロギカ」の集会(2011年10月15日於東京大学駒場キャンパス)において、口頭発表を行い、出席者と意見交換を行った(5.〔学会発表〕)。2011年12月下旬から翌年1月上旬にかけて、イタリアのウディネに出張した。ウディネ大学で「日本における古典学研究」、「ダンテの文学の日本における受容」、そして「今日の日本における口承文芸」について講演し、滞在中同大学で講師を勤め、古典学を研究する M. Venier 氏と研究上の意見交換を行い、また研究上の有意義な助言や示唆を受けることができた。

2012年度は、上述の校訂と注釈についての準備作業を引き続き進めた。その過程で、ホメロス『イリアス』第 23 巻の翻案とも言うべき第 4 巻第 7 歌に含まれる本文上の問題は、恋愛エレゲイア詩に対するプロペルティウスの態度の移り変わりを省察する上で、極めて重要であることに気づく。同歌に焦点を当てた研究を進め、翌年の西洋古典学会で発表できるよう準備した。また 2013年3月には、イタリアのフィレンツェとボローニャを訪れ、文献調査と資料収集を行った。フィレンツェでは上述の A. La Penna 教授と意見交換し、帰国後教授からはプロペルティウス第 4 巻第 7 歌についての最新論文を拝受した。ボローニャでは、その時たまたま当地で講演していた Rosalba Dimundo 教授(パーリ大学)と知り合いになった。彼女は、第 4 巻第 7 歌について注釈書を刊行しており(*Properzio* 4,7, Bari 1990),偶然ながら有意義な意見交換の機会に恵まれた。帰国後、Dimundo 教授の第 4 巻第 7 歌にかんする最新論文をも拝受することができた。2013年6月には文献調査や意見交換の成果を踏まえ、日本西洋古典学会第 64 回大会で報告を行った(5.〔学会発表〕)。この報告は、学会誌編集委員会の承認を受けて、『西洋古典学研究』に掲載された(5.〔雑誌論文〕)。また、報告に際しての小川正廣名古屋大学教授、高橋宏幸京都大学教授との質疑応答を踏まえ、第 4 巻第 7 歌

同様キュンティアとの恋愛のエピソードを扱った第 4 巻第 8 歌についても考察を試み、その成果を所属機関の紀要に発表した(5.〔雑誌論文〕)。この他、4.7 や 4.8 といった個別の歌の考察を通して、ホメロスのプロペルティウス作品への影響について考察する機会を得たので、これをさらに詩集全体にわたって推し進め、慶應義塾大学言語文化研究所の紀要に発表した(5.〔雑誌論文〕)。

4. 研究成果

2011年度は、恋愛詩人として名高いオウィディウスが、叙事詩『変身物語』第 14 巻においてどのように『アエネイス』を翻案しているかを研究した。その結果、単にオウィディウスが『アエネイス』の特定場面を模倣しているだけでなく、『アエネイス』自体が模倣しているホメロス叙事詩やホメロス讃歌の特定箇所を視野に入れていることを指摘した。オウィディウス自身が徹底した文学研究を行っていること、また intertextuality についてのたしかな意識とその効果の積極的利用のあり方が明らかになったと思われる(5.〔雑誌論文〕および〔学会発表〕)。2011年度～2012年度は、S. J. Heyworth のプロペルティウス注釈と校訂版の書評を準備し、これを学会誌に掲載した(5.〔雑誌論文〕)。2012年度～2013年度はプロペルティウスと叙事詩との関係に着眼し、とくにプロペルティウスがホメロス作品を翻案した第 4 巻第 7 歌、第 4 巻第 8 歌について、考察し、研究論文を著した。第 4 巻第 7 歌についての研究論文(5.〔雑誌論文〕)の内容は以下のとおりである。

この詩の解釈について、79-80 は重大な問題点を提示する。近年多くの研究者が、写本伝承の *pelle* に代わる Sandbach の修正案 *pone* を支持している。これは、蕪の詩的な連想に基づくものである。しかし、文脈的な考察はむしろ *pelle* の正しさを示唆する。この論文は、写本伝承を擁護することを目指し、第 4 巻第 7 歌の詩論的性格を徹底的に検証した。その結果、亡霊として詩人の前に現れたキュンティアの発言は、プロペルティウスをして恋(と恋愛詩)の理想に背いたこと、そのことによる王国(*regnum*)の喪失を気付かせる。これこそは、彼女が最早プロペルティウスから寄せられる詩的栄誉に無関心であることの理由である。彼女の唯一の願望は、彼の死後に彼と結ばれることである。彼女こそが、恋愛詩の理想、愛の契(*foedus amoris*)を最高の形で具現している。第 4 巻第 7 歌において、プロペルティウスは恋愛詩を棄てたことへの後悔を、キュンティアの言葉に託して表現している。

一方、第 4 巻第 8 歌にも詩論的性格を読み取ることが可能である。この歌は、キュンティアと本格的に関係を断つ以前、詩人がまだ恋愛中だった頃の一時的な断絶の体験を表している、と解することができる。キュンティアの留守中に別の女たちを呼び招いて夏

を楽しもうとする試みは、恋愛エレゲイア詩から別のジャンル、アナクレオン風の文学へのかりそめの転向を表している。『オデュッセイア』の主人公のように、不意に帰国し、宴の席を滅茶苦茶にする彼女は、文学的転向を無効にし、詩人自身が懐古してやまない恋愛エレゲイア詩の復権を意味していると考えられる(5.〔雑誌論文〕)。

プロペルティウスは、カッリマコス主義を標榜し、恋愛詩の創作を自己の本領とし、その詩集の最終巻である第4巻では、ローマの縁起を題材とした作品を手掛ける。しかしその一方で、ホメロス叙事詩に対する愛着を終生持ち続けていたと思われる。そのことは、作品中におけるホメロスの表現の模倣、比喻や判例における作品への言及という形で現れる。『イリアス』においては、恋愛がごく控えめにしか扱われていないが、詩人はこの作品を恋愛文学の1つとして考え、自作の世界とホメロス世界の接点を見いだすことに積極的である。もちろん、ジャンルの違い故、彼の作品はウェルギリウスの『アエネイス』ほどホメロス叙事詩と密接なかかわりを持つことはなかった。しかし、第4巻第7歌と第4巻第8歌という恋愛詩の総決算とでもいうべき二つ作品において、満を持して『アエネイス』的な手法を試みており、こうして作られた二つの歌は、エレゲイア詩として最高の完成度を示しているように思われる(5.〔雑誌論文〕)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

日向太郎,「プロペルティウスとホメロス」,『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』45(2014), 125-140. (査読無)

(書評)日向太郎, M. Venier, *Platonis Gorgias Leonardo Aretino interprete*, Firenze 2011, 『西洋古典学研究』62(2014), 111-113. (査読無)

日向太郎,「キュンティアの亡霊—プロペルティウス第4巻第7歌」,『西洋古典学研究』62(2014), 65-77. (査読有)

日向太郎,「帰ってきたキュンティア—プロペルティウス第4巻第8歌」,『言語・情報・テキスト』(東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要)20(2013), 13-26. (査読無)

(書評)日向太郎, S.J. Heyworth (ed.), *Sexti Propertii Elegi*, Oxford 2007; Id., *Cynthia*, Oxford 2007, 『西洋古典学研究』61(2013), 133-136. (査読無)

日向太郎,「シビュッラとアエネアス—オウィディウス『変身物語』第14巻120-153についての一考察」,『言語・情報・テキスト』(東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要)18(2011), 1-14 (査読無)

〔学会発表〕(計2件)

日向太郎,「キュンティアの亡霊—プロペルティウス第4巻第7歌」,(日本西洋古典学会第64回大会2013年6月2日於東京都目黒区東京大学教養学部)

日向太郎,「シビュッラとアエネアス—オウィディウス『変身物語』第14巻120-153についての一考察」,(「フィロロギカ集会」2011年10月15日於東京都目黒区東京大学教養学部)

〔図書〕(計1件)

宮下志朗, 井口篤, 中務哲郎, 村松真理子, 日向太郎著,『ヨーロッパ文学の読み方—古典篇』,放送大学教育振興会,2014,80-118,300-304.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

日向太郎(園田太郎)(HYUGA(SONODA), Taro)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号: 40572904

(2)研究分担者 なし
()

研究者番号:

(3)連携研究者 なし
()

研究者番号: